会員の広場

Member's Open Space

難しい言葉（その3）

●美唄歯科医師会会員
雨田　実

先号で，小股云々について池田弥三郎氏が10年以上もの間苦労されたうえでのものとして，昭和50年9月5日号の週刊朝日に，古典横町，おんなの生態講座「ＯＬ読むべからず」として，柳田先生説の伊原氏伝承を基にしての小袖曽我薊色縫を載せたところ，その雑文が伊原氏の眼に触れ，伊原氏から詳しい「小股云々」の後釈ともいうべきお手紙を寄せられた。まことにありがたいことで，これで解釈はさらに深いものになったといえると思う，とある。伊原氏から寄せられた，小股云々後釈ともいうべき手紙を挙げる。

『今週の週刊朝日の随筆拝見しました。思いがけないところへ小生の名が出ていたので驚きました。あの件は10年以上も前のことで前に，お知らせした時には，柳田先生のお言葉をお伝えするだけでなく，私の受け取りかたも書き加えましたため，くだくだと拙い文章を書いたことを今もって憶えております。その後，先生のお言葉が次第に整理がついて来ると，実に簡単明瞭なことが分かりました。それは「下腹が出ていない身體」の一語につきることに思い至りました。この言葉は先生は，はっきりおっしゃらなかったので，前便にも書かれなかった訳ですが，これなら総ての説明がつきます。下腹が出ていなければ，誰でも，小股は切れ上がり。下腹が出ていなければ，先生のおっしゃった蝶番度の良いことも物理的に説明がつきますし，床よしというのもすでに身に付けているところから来るところが多いと思われます。下腹が出ていなければ，顔は別として，腰が締まって，江戸っ子好みの姿になります。小股の切れ上がった女が全部良いとは言えないとも思いますが，良さの確率度が高いということは納得出来ます。先生は永い経験から来ているのでしょうと言われ，それを識ったかぶりしたがる，江戸っ子が気取って口にしたのでしょうと言われました。

10年以上も前になりますが，今月の芝居を見ての閑談が，随分ながく奥野信太郎，戸板康二両氏の対談で雑誌芸能に載っておりましたが，花柳章太郎評の時，奥野氏が花柳を絶賛して，小股の切れ上がった女と評しておりました。花柳の女形には随分と沢山のほめ言葉を贈ることができますが，私は柳田先生のお話を伺って以来，小股の点に関してだけは体質的に失格と見ています。尾上梅幸も同様で歌右衛門の体は合格です。もし章太郎が粋で小股の切れ上がった感じを良く出しているとしたら，それは芸の力だと思います。私はあの太さが，どうにも邪魔をします。こうなりますと，二十歳前後に，小股の切れ上がった，水もしたたるなどと言われた美人でも，三十近くなって脂肪がつき，下腹が出てくれば誰も小股の切れ上がった女とは見てくれないでしょう。色は年増に止めを指す，女盛り，などといろいろ言いますが，そ

れは，小股とは別のジャンルの話で，小股万能は通用しないのではとも考えられます。以上が柳田先生のお話を練り直した私の考察としてお知らせ致します。たまたま機会があって，柳田先生からは詳しいお話をお伺いすることが出来ましたが，折口信夫先生のご意見は，とうとうお伺いすることなしに過ぎましたことが大変に心残りでなりません。』という要旨の内容のものが寄せられました。以上が伊原氏からのお手紙で，まことにありがたいことで謹んでお礼を申し上げたいと思います。私は小股の小よりも，切れ上がっている状態について言っているのではないかということにこだわっていたわけだが，伊原氏からのさらに詳しい「小股の切れあがった女」後釈によって解釈は決定したと言っていいと思う。と書いてから，さらにお手紙を読み直してみたところ，柳田先生のお話は，お聞きすることが出来ましたが，折口信夫先生のご意見は，とうとうお伺いすることなしに過ごしてしまいましたことが，かえすがえすも心残りでございます云々の文面が，胸につかえてしまった。それは10年以上も前に私の持論としての「小股の小はないもの。小首をかしげる，小腰をかがめるなどの小で，ちょっと，ということで，小首，小腰という言葉と同様に，小股の小はないもの（先々号参照）と読売新聞の日本語のみだれに載せた雑文に対して伊原氏から素描と共に柳田国男先生説の小股は明瞭にあるという伝承を頂いたお手紙にも，折口信夫先生のご意見はどうなのでしょう？とあったのを10年以上もの間，ご返事も差し上げずに勝手に放置したまま13年後に週間朝日に勝手な雑文に，お教え頂いた知識を載せてしまい，その内容に対してさらに詳細なご意見を厭味ひとつ，おっしゃらないで，ご親切にお教え頂きまして誠におはずかしい限りで，穴があれば入りたいような屈辱感を覚えました。私の恩師折口信夫先生は昭和28年に亡くなられたことは，伊原氏は良く識っていた筈ですが，私なら生前に先生から何かの折りに小股云々の話を伺っているであろうとの推察からの再度にわたるお手紙の内容を思い，ご生前お聞き得なかったことであるので，残されている先生の数多くの資料を調べさせて頂いても結果は分からないままでいるうち，翌年の昭和51年突然に伊原氏は不帰の人となられてしまいました。誠に心残りとしか申し上げられません。謹んでご冥福を祈念申し上げるばかりです。ご参考までに伊原宇三郎氏の略歴を付しておきます。

洋画家，徳島市生まれ，大正10年東京美術学校(現芸大)を卒業し，同14年から5年間欧州に留学した。帝展でたびたび特選となり，後審査員となる。日本美術連盟委員長などの要職を歴任し，日本美術界発展に大きな功績を残した。

難しい言葉と題して，3回にわたって，雑文というか迷文を綴らせて頂きましたがどうも，歯切れの悪い，結論のないようなしまりのないものになってしまいさらなる考証を約して閉じます。